

「ハンマークラヴィーア・ソナタ」、長大で強大な3楽章と4楽章。精神力と演奏技術の要求、素人の私でも大変な作品と理解。リサイタルのプログラム、つつがなくキッチリが、ピアニストとしてのクリア条件。その素晴らしいパフォーマンスが展開、奇跡のよう。聴き手として、逡巡や戸惑いないことの願い、進行を辿りつつの共同作業。

3楽章の冒頭、くすみがかったマイルドトーン、別世界の幕開け。練りに練った穏やかさ、ソフトペダルの使い分けで、曲想を仕分けるとの工夫。一歩一歩、着実に再現の積み重ね、慌てることなく自分の思いを込め。シリアスな対話、落ち着いた敬虔な祈り、深い静寂、心に響き精神の安定。甘んじることなく、大きなモノとの対峙、絶対的な意思の表れ。メロディーの追跡だけでも、心洗われ清々しさ十分なのに、細部にまで音のバランス、プラスアルファの際立ちにこだわる。さらなる高みのレベルの経験、微笑みを浮かべ、喜びをかみしめ見守るだけ。

4楽章、巨大なフーガのモンスター、途轍もないスケールの立ちはだかり。終わりなき錯覚、エンドレスと見紛うような、コレデモカコレデモカの強引き。スリリングで仰々しい立ち回り、突き詰めての追い込み、トril上乗せオン。ダイナミック・ペインティング、豪快表現の醍醐味、剛腕とスピード感。その一方、きめ細やかな配慮、スミからスミまで存在の意味を与える。これまで培った音楽性をフル回転、感性と技術すべてを注ぎ込み対応。説得力に溢れほぼノーミス、有無を言わざぬ会心の出来。

15年前の積み残しを、リベンジしたいとの真面目さ。そんなピアニストの性格を垣間見る、「いつやるか?」「今でしょ」自問自答が聞えてきそう。1999年3月の東京での演奏、若い女性らしい素直なスタンスの3楽章、チャレンジ精神満載、ハラハラドキドキな4楽章。今日、冷静沈着のコントロール下、積年による素敵な熟成が目の前に、緊張と集中の濃密空間、大丈夫かなという懸念、何時の間にか消失、ヤッタネと言う達成感。

後半は市民権のある作品、アンコール・ピース気味、それぞれの完成度に心地よさ。もったいない、全曲ならばと思うのは欲張りなのか。(2014.6.9)

ベートーヴェン：ピアノソナタ 29番 変ロ長調 Op.106「ハンマークラヴィーア」

ベートーヴェン：ピアノソナタ 1番 へ短調 Op.2-1より 1楽章

ベートーヴェン：ピアノソナタ 8番 ハ短調 Op.13より 2楽章

ベートーヴェン：ピアノソナタ 17番 ニ短調 Op.31-2より 3楽章

ベートーヴェン：パイジェッロの「水車小屋の娘」の主題による

6つの変奏曲 ト長調 WoO70

---

(アンコール)

ベートーヴェン：バガテルイ短調 WoO.59「エリーゼのために」

---